

## <論説>

# ふたつの文明社会論

—アダム・スミスとアダム・ファーガソン—

天 羽 康 夫

### 1

アダム・ファーガソンを知識人論という斬新な視角からとりあげ、ヨーグラ  
ンド、フォーブズ<sup>(1)</sup>らとともに現代のファーガソン研究の出発点ともなったケ  
トラーは、ファーガソンの人気とその急激な凋落に注目する。すなわち、フ  
ァーガソンは、その生存中は、非常に有名であったが、19世紀になると急速に忘  
れられ、今日では、かれの著作は、少数の専門家にしかよまれていない、とい  
うのである<sup>(2)</sup>。ケトラーの指摘から20年あまり<sup>(3)</sup>経た現代では、このように、フ  
ァーガソンを、少数の専門家にしかよまれていない思想家とはいええないであ  
ろう。まず、ケトラーの研究からほどなくして、『市民社会史論』の校訂版がフ  
ォーブズによってだされ<sup>(4)</sup>、さらに、1960年代の後半からはじまるスコットラ  
ンド啓蒙にたいする関心のたかまり<sup>(5)</sup>のなかで、ファーガソンにも言及される  
ようになってきたからである。しかし、かれの代表作ともいえる『市民社会史  
論』（1767年）が、イギリスでは、生前の最終版（第7版、1814年）以来、フ  
ォーブズ版（1966年）まで、約150年間も出版されなかったのをみれば、ケト  
ラーの評価にも、それなりの根拠があったのである。

では、生存中の評判はどうか。『市民社会史論』が生存中に7版までだされ  
たということからどのようなことがいえるか。アダム・スミスの『道徳感情  
論』（1759年）は、著者の生存中に6版まで、『国富論』（1776年）は5版ま  
まででている。もっとも初版から著者の死（スミスー1790年；ファーガソンー  
1816年）までの期間が、各著作のあいだでかなり異なるので、単純な比較は無意

味である。そこで、『市民社会史論』『道徳感情論』『国富論』の順に、初版から5年間にだされた版数をみれば、3, 2, 2, 10年間では、4, 3, 4, 15年間では、5, 4, 6, 20年間では、5, 4, 8となる<sup>(6)</sup>。ここから、『国富論』の名声は、時の経過とともにたかまりつつあることがわかる。しかし、18世紀末までをとれば、ファーガスンとスミスとのあいだに、ほとんど差はない。では、諸外国への普及度はどうか。18世紀末までにほん訳された回数は、スミスのほうがはるかに多い。しかし、『市民社会史論』にも、フランス語訳とドイツ語訳がある<sup>(7)</sup>。ファーガスンの他の著作も、晩年の『道徳政治科学原理』をのぞけば、概して好評であった<sup>(8)</sup>。

このようにみれば、ケトラーのように、「かれ（ファーガスン）は、かれの友人で有名なふたりのスコットランド人、すなわち、ディヴッド・ヒュームとアダム・スミスほど尊敬されたとはけっしていえないが、かれの諸著作は、エディンバラだけでなくパリとかロンドンでも好意的に受け入れられたし、また、かれの諸見解は、教室だけでなく、サロンとか応接間でも議論された」<sup>(9)</sup>といってもよいであろう。ここでケトラーは、ヒュームとスミスを、ファーガスンの友人という。たしかにヒュームとスミスは、たがいに遺言をたくしあうほどの親しい間柄にあったが、かれらとファーガスンのあいだには、さまざまな対立があったといわれている。

ヒュームは、『市民社会史論』の前身ともいえる「洗練論」をたかく評価し、その完成に期待をかけていた<sup>(10)</sup>。しかし、『市民社会史論』そのものは、ヒュームを満足させなかった。その原稿をみたヒュームは、1766年2月11日のヒュー・ブレアあての手紙でつぎのようにいうのである。

「ぼくは、ファーガスンの希望でかなりまえからぼくの手もとにおかれていたかれの原稿を、なんども精読しました。ぼくは大きな期待をもってそれをよみました。その期待は、何年かまえにその小部分を見本としてよんだことから、ぼくがかれにたいしてもった好意的評価と、君やロバートソン博士の、この原稿にたいする評価とにもとづくものです。しかし、残念なことです。この原稿は、いかなる意味でも、ぼくの期待に答えていません。それは、スタイルに

においても推論においても、形式の点でも内容の点でも、公刊にふさわしいとは思われません。かれの名声のことを思えば、ほくの意見を君にいわざるをえないのです……。君とロバートスンにその原稿をもっと真剣に、また、それほど期待をかけずに、もう一度よんでいただきたく思います。これは非常に重要な問題です。とくにこの点における、結果としての失敗は、それにくやしさがともなうだけでなく、現在、非常に繁盛しているかれのクラスの足をひっぱり、その信用をなくしてしまいます<sup>(11)</sup>。」

これをみるかぎり、対立といっても、ヒュームとファーガソンのそれは、考え方の相違にすぎない。むしろここから、ファーガスンにたいする先輩ヒュームの配慮をよみとることができる<sup>(12)</sup>。すなわち、ヒュームは、本の失敗がファーガスンの収入減につながることを危惧しているのである。対立として有名なのは、スミスとファーガスンの対立である。スミスがファーガスンを、ひょうせつをしたとして非難していたというのである。だが、約100年後、マルクスは逆に、ファーガスンをスミスの教師、あるいは、スミスをファーガスンの弟子とかいっている<sup>(13)</sup>。この問題は、今世紀はじめのオンケン<sup>(14)</sup>の研究をへて、現代でも、さまざまな議論がある。しかしここには、すでに指摘されているように<sup>(15)</sup>、研究者のあいだに誤解と独断とがある。スミスが、どの時点で、ファーガスンのどの部分を指して、ひょうせつと非難したのか、あまりはっきりしないのである。時期については、スミスが1755年にグラスゴウの学会に提出したものとして、デュガルド・スチュアートのつたえる有名な文書が、ファーガスンにたいするものであったとすれば<sup>(16)</sup>、1755年以前のこととなり、また、アレクサンダー・カーライルのいうように<sup>(17)</sup>、『市民社会史論』がひょうせつの非難をうけたとすれば、1767年以後のこととなる。さらに、最近では、もっとあと、すなわち、1780年以降だとする説まで提出されている<sup>(18)</sup>。他方、ひょうせつ箇所は、スチュアートは明示していないが、カーライルにしたがえば、『市民社会史論』ということになる。しかし、そのどの部分かということとは分らない。分業論が争点であったようにいわれることが多いが、典拠は、はっきりと示されていないし、分業論といってもばくぜんとしてい

る。分業による生産力の上昇という見方（肯定的評価）から、分業による奇型化という見方（否定的評価）まで、さまざまなものがある。ここまでくれば、スミスがファーガソンを非難したという事実そのものがあやしくなってくる。では、のこされた資料から、ふたりの関係について、どのようなことがいえるか。

おなじ年（1723年）の、かなり近い時期に<sup>(19)</sup>、生まれた「スコットランド啓蒙のふたりのアダム」、スミスとファーガソンの交流がいつ頃からはじまったか、正確なことは分らない。しかし、ファーガソンが従軍牧師の職を辞任する頃までは、両者のあいだに、それほど多くの接触の機会があったとは思われない。かれらの出身地も、また、かれらの出身大学もことなる。スミスは、スコットランドの東岸の港町、カコーディで生まれ、1737年に西岸にあるグラスゴウ大学に入学する。他方、ファーガソンは、おくれたハイランドの小さな村、ロジレイトに生まれ、スミスより1年おくれて、スミスとは逆に、東岸のセント・アンドリュース大学に入学する。しかも、1740年には、スミスは、スコットランドを離れ、オクスフォード大学に留学する。そして、スミスがスコットランドに帰る前年（1745年）に、ファーガソンはふたつめの大学であるエディンバラ大学をはなれ、以後、従軍牧師としてブラック・ウォッチ（スコットランド高地第42連隊）とともに、9年間も、各地を転々とするようになるのである<sup>(20)</sup>。

しかし、ファーガソンは、1754年、従軍牧師を辞し、軍隊から離脱する。『アダム・スミス書簡集』には、かれらのあいだの書簡が10通（いずれもファーガソンからスミスにあてたもの）ふくまれているが、その最も古いものが、この時期のものである<sup>(21)</sup>。この頃、スミスは、グラスゴウ大学教授として、学界における地位を確立しつつあった。そして、グラスゴウのみならずエディンバラの文化運動にも積極的に参加していた。この年、エディンバラで、スコットランド文化向上に大きく貢献することになる選良協会が、アラン・ラムジーによって創設されたが、スミスは、ラムジーの相談役として、この協会の創設と運営に大きな役割をはたしていた。そして、軍隊をはなれたファーガ

スンも、この協会のメンバーとなるのである。したがって、ここでの会合が両者の接触の場となったであろう。また、1758年には、大学人事をめぐる、両者をまきこんだ計画があった。すなわち、スミスを、グラスゴウ大学道徳哲学講座からエディンバラ大学公法学講座に移し、定職のなかったファーガソンを、スミスの後任にしようとする計画である。これを推進したのはヒュームであるが、スミスの拒否により、この計画はたちぎえになる。しかし、ファーガスンは、その翌年、周囲の予想に反して、エディンバラ大学自然哲学教授職を獲得し、また、周囲の心配をよそに、そのポストで成功するのである<sup>(22)</sup>。

こうして、1760年代には、スミスとファーガスンは、スコットランドを代表するふたつの大学、すなわち、グラスゴウ大学とエディンバラ大学の有名教授となる。そして、かれらの交流もつづく。のこされた手紙から、1761年11月頃にはファーガスンが、スミスの友人の就職の世話をしていたことがわかる<sup>(23)</sup>。また、1762年、国民義勇兵創設のために作られ、多くの文化人と結集した「ポーカー・クラブ」に、両者とも参加していた<sup>(24)</sup>。だが、ファーガスンが念願の道徳哲学教授職を獲得した1764年、スミスは、グラスゴウ大学を辞任し、バックルー公の家庭教師として大陸旅行に出発する。以後、10年あまり、両者の手紙はのこっていない。これは、スミスが故郷カコーディで、『国富論』の準備に専念していたときである。ほぼできあがった原稿をもってスミスがロンドンに向ったのは、1773年であり、それをしたファーガスンは、『市民社会史論』の改訂版（第4版、1773年）で、『国富論』出版の近いことを予告する<sup>(25)</sup>。また、ロンドンにいたスミスは、ファーガスンを、チェスタフィールド家の家庭教師に推せんし、ファーガスンは、この職を受諾し、1774年、教授職のまま家庭教師として大陸に出発する。このことは、教授の地位をめぐる、エディンバラ市当局との対立を引きおこした。また、のちに、年金をめぐる、チェスタフィールド家とイザコザを生ずることになるが、それにかんして、ファーガスンとスミスのあいだでとりかわされた手紙が一通のこっている<sup>(26)</sup>。

この間、1776年に、『国富論』が出版され、その約1ヶ月後、ファーガスンは、スミスにつきのような手紙をおくっている。

「ここしばらくのあいだ、君の本をよみ、それをぼくの学生たちに推せんしたり紹介したりするのに忙しくて、君に手紙をかくことができませんでした。……これらの問題にかんしてはまちがいなく、君がひとりで君臨し、世論を形成することになるでしょう。そして、すくなくともきたるべき数世代を君が支配することをのぞんでいます。……たしかに君は、教会、大学、および商人をおこらせるようなことをのべていますが、これらすべてにたいしては、ぼくも、よろこんで君の味方になります。しかし、君は、同様にして、国民軍をおこらせるようなことものべていますが、この点では、君に反対せざるをえません。誰にもわからないことですが、それほど遠くないと思われ、なんらかの危機のばあい、この国の紳士や農民たちを怠惰にすごさせたり、かれらがかれら自身においてもっているかもしれないあらゆる資源をないがしろにさせたりするのに、なにも哲学者の権威をかりる必要はありません。(27)」

ここには、意見の対立もみられるが、友人の本の出版を喜ぶ、ファーガソンの気持があらわされている。『国富論』出版後、1778年スミスは、スコットランド税関吏に任命され、エディンバラに居をさだめ、ヒュームなきあとのエディンバラの文化運動の中心人物となる。アダム・スミス・クラブともいわれたオイスター・クラブが作られたのは、この頃であった。このクラブでスミスとともに中心的役割をはたし、のちにスミスの遺稿集『哲学論文集』の編集者となる、ブラックとハットンは、ファーガスンとも深い関係にあり(28)、ファーガスンも、このクラブにしばしば足をはこんだといわれている。もっとも、ファーガスンは、1780年には、病気でたおれ、ブラックの指示(菜食療法)により回復したとはいえ、社交会からは身をひくことになる。だが、スミスの死の直前には、ファーガスンが、旧友、スミスを見舞ったことが、レーによって伝えられている(29)。

こうしてみれば、スミスとファーガスンは、それほど親密な関係にあったとはいえないが、とくに対立をしていたとも思われぬ。かれらは、スコットランドを代表する知識人として、たがいに面識があり、ファーガスンが健康をそこなうまでは、交流をつづけていたのである。選良協会、ポーカー・クラブ、

あるいは、オイスター・クラブが、かれらの接触の場であった。また、かれらの文通のおおくは、かれら自身、あるいは、教え子の教育とか就職にかかわるものであった。ひょうせつ問題は、事実ほうたがわしいが、こうした知識人＝著述家としての両者の関係を示すエピソードとしてはおもしろい。だが、個々の見解のなかには、両者のあいだに類似したものがあつたとしても、両者の思想の基調は対照的であつた。伝記の世界から思想の世界にはいってこよう。

- (1) Herta Helena Jogland, *Ursprünge und Grundlagen der Soziologie bei Adam Ferguson*, Berlin, 1959. フォーブズについては注(4)をみよ。
- (2) David Kettler, *The Social and Political Thought of Adam Ferguson*, Ohio State University Press, 1965, pp. 3-4.
- (3) ケトラーの研究は、単行本として公刊されたのは、1965年（したがつて、20年たらず）であるが、これは、1960年に、同じタイトルで、*An Intellectual and the Emergence of Modern Society* という副題を付して、コロンビア大学に提出された学位論文をもとにしている。この学位論文を基点にすれば、今日まで、22年（したがつて、20年あまり）となる。
- (4) Adam Ferguson, *An Essay on the History of Civil Society*, edited, with an Introduction, by Duncan Forbes, Edinburgh, 1966（以下、EHCS. と略す）。これは、今日、『市民社会史論』の標準版として通用し、1978年には、その普及版が、また、1980年には、シュナイダーの序文を付したリプリント版が、出版された。フォーブズはまた、ヤングらとともに、エディンバラのニュー・タウン建設200周年ならびにセント・アンドリューズで行われた第2回国際啓蒙史学会を記念すると同時に、『市民社会史論』200周年記念という意味をもこめて、つぎのような講演集をまとめている。*Edinburgh in the Age of Reason, a Commemoration*, by Douglas Young, A. J. Youngson, George E. Davie, Duncan Forbes, The Hon. Lord Cameron and Allan Frazer, 1967. そのなかで、フォーブズ自身のファーガスン論、*Adam Ferguson and the Idea of Community* を発表している。
- (5) スコットランド啓蒙研究の大きな流れについては、水田洋「スコットランド研究のための書誌——とくにその啓蒙思想について——」『調査と資料』第73, 74号, 1982年, 第1部「思想的地域としてのスコットランド——とくにその啓蒙思想について——」をみよ。なお、水田には、ファーガスンについて以下のような研究があり、本稿はこれらから多くの示唆をえている。「スミス研究の動向と問題」『科学と思想』第22号1976年、「アダム・スミスとアダム・ファーガスン」『経済系』第110集1976年（これらは、高島善哉他『アダム・スミスと現代』同文館1977年に収録されている）。

- Scottish Militia Tracts, edited with an Introduction by H. Mizuta, 『調査と資料』第62号1977年, *Two Adams in the Scottish Enlightenment: Adam Smith and Adam Ferguson on progress, Transactions of the Fifth International Congress on the Enlightenment*, 1980.
- (6) 『市民社会史論』の刊行状況はつぎの通り。初版(1767年)第2版(1768年)第3版(1768年)第4版(1773年)第5版(1782年)第6版(1793年)第7版(1814年)。これら以外にも Dublin 版(1767年) Philadelphia 版(1773年) Basil 版(1789年)がある。『道徳感情論』『国富論』の刊行状況については、水田洋「アダム・スミス書誌」『アダム・スミス研究』, 未来社, 1968年をみよ。
- (7) Adam Ferguson, *Versuch über die Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft*, Leipzig, 1768. Adam Ferguson, *Essai sur l'histoire de la société civile……* traduit de l'anglois, par M. Bergier, Paris, 1783. なお, 1796年には, この仏訳の新版がでている。
- (8) 『市民社会史論』以外のファーガソンの主要な著作は, ここにあげた『道徳政治科学原理』 *Principles of Moral and Political Science*, Edinburgh, 1792. 『道徳哲学綱要』 *Institutes of Moral Philosophy*, Edinburgh, 1769. および『ローマ共和国盛衰史』 *The History of the Progress and Termination of the Roman Republic*, London, 1783. である。『道徳哲学綱要』は, 著者の生存中に3版までだされ(第2版—1773年, 第3版—1785年), これら以外にも, Basil 版(1800年) Mentz 版(1815年)がある。またこれは, 諸外国にはほん訳され(独訳—1772年, 1787年, 仏訳—1775年, 伊訳—1790年, 露訳—1804年), ファーガスンはこの著作により道徳哲学者としての地位を内外において確立するのである。『ローマ共和国盛衰史』も, ファーガスン生存中に数種の改訂版(1799年, 1805年, 1813年)が出され, これら以外に, Dublin 版(1783年) Philadelphia 版(1805年, 1811年), 独訳(1784—6年) 仏訳(1784—91年, 1810年)がある。本書は, ファーガスン死後も, 標準的なローマ史として通用し, とくに, アメリカでは19世紀中頃までに, 縮刷版もふくめれば, 10種以上のものがだされている。この点からみれば, ケトラーのように, ファーガスンが19世紀になると忘れられてしまったとはいえなくなる。これらに比較すれば, 『道徳政治科学原理』は, ごく最近の復刻版まで, 英語でだされた版は一種もなく, ただ独訳(1795年)と仏訳(1821年)があるだけである。
- (9) D. Kettler, *op. cit.*, p. 3.
- (10) 1759年4月12日付でアダム・スミスにあてた手紙のなかでヒュームはつぎのようにいう。「ファーガスンはかれの洗練論を非常によくしました。いくら手をつかえれば, それはみごとな本になるでしょう。」 *The Correspondence of Adam Smith*, edited by E. C. Mossner and I. S. Ross, Oxford, 1977, p. 34. さらにヒュームは, ロバートソンにも同趣旨のことをのべている。 Cf. *The Letters of*



*David Hume*, edited by J. Y. T. Greig, Oxford, 1932, vol. I, p. 308.

- (11) *Ibid.*, vol. II, pp. 11—2.
- (12) ヒュームは、『市民社会史論』のかれの予想外の成功をよろこび、出版直後のロンドンの好評をファーガスンにつたえている。Cf. *ibid.*, vol. II, pp. 120—21, 125—26. ただしこれによってヒュームが自分の評価をかえた訳ではない。すなわち、1767年4月1日のブレアにあてた手紙で、『市民社会史論』を再読したけれども、自分の考えはかわらない、自分が誤っているかどうかは、『市民社会史論』の人気がつづくかどうかによって判断されるであろう、というのである。Cf. *ibid.*, vol. II, p. 133.
- (13) K. Marx, *Misère de la Philosophie*, 1847, (Marx Engels Werke, Band 4, SS. 146—7. 山村番訳『哲学の貧困』岩波文庫, 1965年, 143—4ページ), Do., *Das Kapital*, Band 1, Dietz Verlag, 1962, SS. 137, 375, 382—4, (長谷部文雄訳『資本論』第1部, 青木書店, 248, 588—9, 598—601ページ)。
- (14) A. Oncken, Adam Smith und Adam Ferguson, *Zeitschrift für Sozialwissenschaft*, Band 12, 1909.
- (15) 水田洋「アダム・スミスとアダム・ファーガスン」(前出) 14—16ページ(高島善哉他, 前掲書, 91—5ページ)。
- (16) Dugald Stewart, *Account of the Life and Writings of Adam Smith LLD.*, in *Adam Smith, Essays on Philosophical Subjects (and Miscellaneous Pieces)*, edited by W. P. D. Wightman, J. C. Bryce and I. S. Ross, Oxford, 1980, pp. 321—2. ただし, スチュアート自身はファーガスンの名前をあげていない。スミスの念頭においていた人物が, ファーガスン(とロバートソン)であったと推定するのは, スコットである。Cf. W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, 1937 (Kelley Reprint, 1965), pp. 101, 118—20.
- (17) A. Carlyle, *Anecdotes and Characters of the Times*, edited with an Introduction by J. Kinsley, Oxford, 1973, p. 144.
- (18) Cf. H. H. Jogland, *op. cit.*, S. 22. R. Hamowy, Adam Smith, Adam Ferguson, and the Division of Labour, *Economica*, vol. 35, no. 139, 1968, pp. 254—5.
- (19) スミスの生まれた月日は正確にはわからないが洗礼日は6月5日であった。他方, ファーガスンは, 6月20日生れである。以下の叙述で, スミスについては, J. Rae, *Life of Adam Smith*, 1895, reprinted with an Introduction by J. Viner, Kelley, 1965, (大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店, 1972年), W. R. Scott, *op. cit.* および, 水田洋『アダム・スミス研究』(前出) を, ファーガスンについては, J. Small, *Biographical Sketch of Adam Ferguson, LL. D.*, ……*Transactions of the Royal Society of Edinburgh*, XXIII, Part III, 1864. D. Kettler, *op. cit.*, chapter 3, Adam Ferguson: Biography. J. B. Fagg, *Adam Ferguson* :

*Scottish Cato*, Diss. (University of North Carolina), 1968. を参考にした。

- (20) J. B. Fagg, *ibid.*, p. 29によれば、ファーガスンは、1745年から1751年の休暇による帰省まで、一度も、スコットランドに帰っていない。かれは、この休暇の大半を故郷のロジレイトとその近辺で送っているが、エディンバラをも訪れている。そこでかれがスミスと会った可能性は大きい。スミスは、1751年1月にグラスゴウ大学に就任するが、同年10月まではエディンバラにとどまっていたし、また、グラスゴウに移ってから、スミスは、しばしば、エディンバラに足をはこんでいるからである。だが、休暇後ファーガスンは、アイアランド駐屯中のかれの部隊のもとに帰り、以後3年間、軍隊にとどまるのである。
- (21) 1754年10月に Groningen からスミスにあてた手紙。これは手紙の末尾の部分だけしか伝えられていないが、その部分でファーガスンは、自分は聖職をはなれたので、以後「聖職者の称号」をつけてくれるなという。 *The Correspondence of Adam Smith*, p. 13.
- (22) 自然哲学にかんしては、ファーガスンはまったくの素人で、教授人事をめぐるきかない取引になれていた当時の人びとですら、この人事には驚いたという。しかし、ファーガスンは、任命から講義をはじめまでの3ヶ月間に、講義ノートを準備し、以後、道徳哲学講座に移るまでの5年間、自然哲学の人気教師として通用したのである。D. Kettler, *op. cit.*, pp. 50—3. ファーガスンの自然哲学を知る手掛りとして、[A. Ferguson], *Of Natural Philosophy*, [Edinburgh, C. 1760]. が、エディンバラ大学図書館にある。
- (23) *The Correspondence of Adam Smith*, pp. 79—80.
- (24) ただし、この点では、両者のあいだに意見の対立があり、スミスは、1774年まで会員としてとどまっていたが、1786年に設立された「ヤンガー・ボーカー・クラブ」には参加していない。水田洋『アダム・スミス研究』（前出）104—5ページをみよ。
- (25) Adam Ferguson, *An Essay on the History of Civil Society*, 4th edition, revised and corrected, 1773, republished by Gregg International Publishers, 1969, pp. 241—2. Cf. J. Rae, *op. cit.*, p. 264, (邦訳, 329ページ)。
- (26) *The Correspondence of Adam Smith*, p. 225.
- (27) *Ibid.*, pp. 193—4. ここでいわれている国民軍をめぐる対立は、両者の論争点となる。これはたんに国民軍評価のちがいを意味するだけでなく、文明社会（近代市民社会）把握全体にかかわる重要な問題である。この点については、水田洋「アダム・スミスとアダム・ファーガスン」（前出）、篠原久「スコットランド民兵論とアダム・スミス」『経済学論究』（関西学院大学）第32巻第4号、1979年をみよ。
- (28) ファーガスンとブラックの母とは、いところ同士であり、また、ファーガスンの妻は、ブラックのめいであつた。1780年に病気で倒れたファーガスンを、当時としては、奇跡的に救ったのは、ブラックであつた。しかし、皮肉なことに、ブラックより

もファーガスンが長生きをし、かれが、ブラックの回想を、エディンバラ王立協会  
で報告することになる。Adam Ferguson, *Minutes of the Life and Character  
of Joseph Black, M.D., Transactions of the Royal Society of Edinburgh, V*  
(1805). ハットンとの関係については、Kettler, *op. cit.*, p. 54, をみよ。

② J. Rae, *op. cit.*, pp. 433-4. 邦訳, 540ページ。

## 2

人間の歴史は、進歩の過程なのか、墮落の過程なのか。古代から近代への歴史の歩みは、人間になにをもたらしたか。文明は、人間を幸福にするものであろうか。18世紀、とくにその後半におけるスコットランドの急激な近代化のなかから生まれたスコットランド歴史学派とかスコットランド啓蒙とかいわれている一群の思想家たちをとらえたのは、こうした問題であった。社会の急速な変化が、歴史への反省を生み出したのである。ここから、文明についてのさまざまな見方が生まれてきた。その両極端に位置するのが、スミスとファーガスンであった。

これまでもしばしば指摘されてきたように、スミスは文明社会を、分業のもとで生産力が上昇する富裕な社会とみていた。狩猟漁労で生計をたてる野蛮国民のあいだでは、はたらくことのできる人はすべて有用な労働についているのに、人びとはまずしく、「かれらの子供や老人や長い病気にかかっている人びとを、ときには直接にころさざるをえなくなったり、ときには放棄して餓死または野獣の餌食にゆだねざるをえなくなるほどである。これと反対に、文明化して繁栄している諸国民においては、多数の人びとがまったく労働しないで、かれらのうちのおおくのものは、はたらいっている人びとの大部分にくらべて、10倍おおくの、しばしば100倍おおくの労働の、生産物を消費するのだが、それでもなお、この社会の全労働の生産物は、非常においおいで、すべての人びとがしばしばゆたかに供給されているし、もっとも低くまずしい階層の職人でさえも、もしかれが節約勤勉であるならば、生活の必需品および便宜品のわけまえを、どのような野蛮人が獲得しうるよりもおおく、享受しうるので

ある。(1) 文明社会は搾取にもかかわらず富裕な社会なのである(2)。

さらにこの社会は、安全な社会でもある。商工業が発達し、人びとが独立してくると、犯罪も少なくなるというのである。「最大の治政があり、それにかんしてもっとも多くの規制が行われている諸都市に、必ずしも最大の安全が存在するわけではない。……犯罪行為を防止するものは、治政であるよりは、むしろ他人に寄食する者をできるだけ少なくすることである。従属ほど人間を墮落せしめるものではなく、これに反して、独立は人びとの正直をさらに増進するのである。商工業の樹立はこの独立をもたらすものであって、犯罪を防止する最善の治政である(3)。」また、商業の発達は、かれらのあいだに、あたらしい道徳を定着させる。取引回数がふえてくると、人びとは、評判を落すことをおそれて、約束を、誠実に守るようになるからである。こうして、商業が導入されると、未開野蛮な国ではほとんどみられない徳性、すなわち誠実とか几張面がひろまるというのである(4)。

したがって、文明社会は、スミスによればゆたかで安全な社会、しかも、道徳のゆきわたる社会となる。たしかにスミスも、分業の弊害に気付いていた。野蛮な社会では、各人は多様な仕事をするので、かれの能力がきたえられる。各人は、戦士であると同時に政治家でもあって、「その社会の利害関係およびそれを統治する人びとの行動について、一応の判断を形成することができる(5)。」だが、分業の発達とともに、大多数の人びとは、「人間として創造されたものとして可能なかぎり、おろかで無知になるのがふつうである。かれの精神の麻痺によって、かれは、どんな理性的な会話をたのしむことも、それに参加することも、できなくなるだけでなくどんな寛大、高貴あるいはやさしい感情をもつこともできなくなり、その結果、私生活のふつうの義務についてさえ、それらのうちの多くにかんしてなにも正当な判断を形成することができなくなる。かれの国の、重大で広範な利害関係について、かれはまったく判断することができない。そして、かれをそうでないようにするために、きわめて特別な骨おりがおこなわれるのでないかぎり、かれは、戦争においてかれの国を防衛することも、おなじように、できないのである(6)。」

これをみるかぎり、スミスは、野蛮人の優位をといているかにみえる。分業社会に生きる文明人は、知的社会的軍事的徳性を失い、国の防衛にあたれなくなるし、また、公私いずれにおいても正当な判断を下しえなくなるというのだ。とりわけ、尚武の精神の衰退にたいするスミスの批判は厳しい。「臆病もの、すなわち自己を防衛することも復讐することもできない男は、あきらかに、男性の性格のうちの、もっとも不可欠な部分のひとつをかいている。肉体のもっとも不可欠な部分のどれかをうしなったり、それらの部分を使用できなくなったりした人が、肉体的に不具化され奇型化されるのと同じく、かれは精神的にそうされているのである<sup>(7)</sup>。」さらにスミスは、肉体的不具者よりも精神的不具者のほうが不幸であり悲惨であるという。このようなスミスの主張のなかに、疎外の問題を看取する論者もいる<sup>(8)</sup>。だが、スミスは、文明社会のなかに、こうした弊害を克服する手段があることをしていた。

まず、公共は一般大衆に、わずかな費用で、読み書き計算、さらに、初歩的な幾何学と機械学といった、教育のうちのもっとも不可欠な部分を、奨励、あるいは、強制することができる<sup>(9)</sup>。他方、尚武の精神を維持するためには、「特別な骨おり<sup>(10)</sup>」「適切な骨おり<sup>(11)</sup>」を必要とする。しかし、その維持が困難だとしても、火器の発明は、戦争の形態をかえ、「身体をつよさと敏捷さ、あるいは武器の使用における非常な手ぎわと技術」にかわって、「規則ただしさ、秩序、命令への即座の服従」を要求する<sup>(12)</sup>。そして、こうした資質は、富裕な文明社会のもつ常備軍制度によって、つちかわれるのである。したがって、近代の富裕な社会は、貧困野蛮な諸国民をおそれる必要はない。「近代の戦争においては、火器についての大きな費用が、その費用をもっともよく支払いうる国民を、明確に有利にする。その結果、富裕で文明化した国民を、貧困野蛮な国民にたいして、有利にする。古代においては、富裕で文明化した諸国民は、貧困野蛮な諸国民にたいして自己を防衛することの、むつかしさをしる。近代においては、貧困野蛮な国民は、富裕で文明化した国民にたいして自己を防衛することのむつかしさをしる。火器の発明は、一見したところたいへん有害におもわれる発明であるが、それはあきらかに、文明の永続と拡大の双

方にとって、有利なのである<sup>(13)</sup>。」

スミスによれば、古代とことなり、近代には、文明の永続と拡大が可能なのである。こうして、スミスの文明社会論は、オプティミステックな色彩をおびてくる<sup>(14)</sup>。

- (1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford (以下, WN. と略す), vol. I, p. 10. 水田洋訳『国富論』河出書房, 1965年, 上巻, 9—10ページ。
- (2) この点をあきらかにし、戦後のスミス研究に大きな刺激を与えたのだが、内田義彦『経済学の生誕』未来社, 1953年である。
- (3) Adam Smith, *Lectures on Jurisprudence*, edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. Stein, Oxford, 1978, pp. 486—7. 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』東京, 1947年, 314—5ページ。
- (4) 周知の一節であるが重要なので以下に引用しておく。「いかなる国においても商業が導入されるときには、いつも誠実と几帳面がそれにともなって起る。これらの徳性は、未開野蛮な国ではほとんどみられない。……商人は評判をおとすことをおそれて、すべての約束を几帳面にまもる。ある人が1日におそらく20の契約を結ぶとすると、そのばあいかれが隣人をだまそうと努力してえるものは、詐欺をするようにみえたというだけのことでかれの失うところに、およばない。人びとのあいだの取引がまれなところでは、われわれは、かれらがいくらだまそうとしているのをみる。それはかれらが、ぬけめのないたくらみによって、それにともなう評判のそう失いによって失うよりも、おおくをえることができるからだ。」(ibid., pp. 538—9, 邦訳, 452—3ページ)
- (5) WN., vol. II, p. 783. 邦訳, 下巻, 202ページ。
- (6) Ibid., vol. II, p. 782. 邦訳, 下巻, 201ページ。
- (7) Ibid., vol. II, p. 787. 邦訳, 下巻, 205ページ。
- (8) E. G. West, *The Political Economy of Alienation—Karl Marx and Adam Smith*, *Oxford Economic Papers*, vol. 21, no. 1, 1969.
- (9) Cf. WN., vol. II, pp. 785—6. 邦訳, 下巻, 203—4ページ。
- (10) 前出, 注(6)。
- (11) WN., vol. II, p. 786. 邦訳, 下巻, 205ページ。
- (12) Ibid., vol. II, p. 699. 邦訳, 下巻, 156ページ。
- (13) Ibid., vol. II, p. 708. 邦訳, 下巻, 164ページ。
- (14) 「スミスの歴史的展望は、スコットランド資本主義の急速な発展の線に完全にそっていた」といわれる(水田洋『アダム・スミス研究』前出, 254ページ)。

## 3

ファーガソンの立場は、ペシミステックな色彩をおびる。『市民社会史論』を特徴づけるのは、するどい文明批判である。

ファーガスンは、古代ギリシヤ、ローマ人の公共的精神に近代人の利己主義を対置する。「古代ギリシヤ人やローマ人にとっては、個人は無であり、公共がすべてであった。ヨーロッパの非常におおくの国々における近代人にとっては、個人がすべてであり、公共は無である<sup>(1)</sup>。」そして、「商業国家」では、人びとは、「孤立した存在、孤独な存在<sup>(2)</sup>」となり、相互に敵対する。また、同胞を、「自分の家畜とか土地<sup>(3)</sup>」のように取り扱う。こうしたなかで富が偶像となり、人間と財産との転倒現象が生じるのである。「かれは、おそらくかれがけっして使用することがないと思われる富のたくわえのなかに、かれの最大の関心の対象、かれの精神の主要な偶像をみる。かれは、かれの身柄とかれの財産のあいだにつきのような関係を知覚する。すなわち、かれが自分のものと呼ぶものを、ある意味で、かれ自身の一部、すなわち、かれの身分、かれの状態、かれの性格の一構成要素とするような関係であって、そのなかでかれは、いかなる真の楽しみとも無関係に、幸福であったり不幸であったりするかもしれないし、いかなる個人的功績とも無関係に、注目されたり無視されたりするかもしれないし、また、自分の身柄は安全で、自分の自然的欲求のすべてが完全に充足されているのに、傷つけられたり侵害されたりするかもしれないのである<sup>(4)</sup>。」

また、人びとは政治への関心を失い、商業が諸国民の偉大な目的となる。かれらは、平和を獲得すると、それを支えている法とか統治構造への熱意を喪失し、それぞれ勝手に自分の利益だけをはかるようになるというのだ。「かれらのかれらの獲得した平穏な状態を、自分たちの安全保障がそれに依存している法とか統治構造への熱意を涵養するために用いていない。それを用いてかれらは、別々に、また、各人が自分のために、個人的な栄達とか利益になるようなそれぞれの仕事を行うのである……。こうして、あらゆる営利的仕事を包含すると思われる商業が、諸国民の偉大な目的として、また、人類の主要な研

究対象としてみなされるようになるのである<sup>(5)</sup>。」このような過程と並行して、絵画、音楽といった「孤独な気晴し<sup>(6)</sup>」がひろがる。「われわれは、個人的運命を配慮すべき唯一の対象とみなすことになれすぎて、つぎのような事態におちいつている。すなわち、民主的諸制度のもとですら、また、さまざまな階層の人びとが、自分の国の統治に参加すべく召集され、しかも、臣民の側における警戒と活動なしには、自分たちの享受している諸自由をながく保持しえない諸国家においても、俗に立身出世をしなかったといわれる人びとは、仕事を見失っているようにおもわれる。かれらは、孤独な気晴しにむかい、かれらがこのんで趣味とよぶもの、すなわち、園芸、工作、絵画、音楽といった趣味を養うのである。こうした手段で、かれらは物憂い生活の空白をうめようと努力し、そして、かれらの無気力を、自分の国家あるいは人類にたいする積極的奉仕によっていやす必要があるのにそれをさけている<sup>(6)</sup>。」

さらに、分業のもとで、人間の奇型化がすすむ。「この分業の時代には考えること自体がひとつの特殊な仕事となる<sup>(7)</sup>」のである。しかし、技術の進歩とともに国民の能力のていどが向上するかどうかは疑問だ。「多くの機械的技術は、まったく、どんな能力も要求しない。それらは感情や理性の全面的抑圧のもとで、もっとも成功する。そして、無知は、迷信の母であるとともに産業の母でもある。…… 製造業は、精神がもっとも顧慮されないところで、また、仕事場が、…… 人間を部品とする機械と考えられるようなところで、もっとも繁栄する<sup>(8)</sup>。」また、「職業の分割は、……結局、社会の絆を解体し、創意のかわりに形式をおき、そして、心情と精神をもっとも幸福に働かせる仕事の共同的な舞台から、諸個人を退かせることになるのである。／洗練された社会の成員たちを相互に切り離している職業の区分のもとで、あらゆる個人は、かれ独自の技能、かれ特有の熟練を持っていると思われる……。そして、社会は、そのいずれもが社会そのものの精神によって活気づけられていない諸部分から構成されるようになる<sup>(9)</sup>。」

こうしたなかで、学芸も衰退する。世間からはなれて書物からえられる知識が重視されるのは、近代ヨーロッパに特有なことなのである。「われわれは、



社会のなかでかきたてられた魂から生まれ、そして、活動的生活の生き生きとした印象からえられる、思想と雄弁の美に、死語の文法とか注釈者の手をとおして、到達しようと努力する。われわれが獲得しうるのは、往往にして、どんな科学であれ、その基本原理にかぎられ、そしてそれによって、有益な知識ならもたらすはずの、能力や力のあの拡大にいたることはめったにない。ユークリッドの原理を研究するが測量のことをけって考えない数学者のように、われわれは、社会についてよむが、人びとと共に行動しようとしなない。われわれは、政治学の言葉をくりかえすが、国民精神を感じない……<sup>(10)</sup>こうなると学問も形骸化する。「われわれは多年にわたる実例からつぎのように考えてもまちがいはないであろう。すなわち、研究諸団体に付与される寛大な寄付とか研究のためにそれらに与えられる余暇は、天分の働きをかきたてる手段としてもっとものぞましいものとはいえないということである。余暇の産物と想像されている科学それ自体も、世間からしりぞいた修道院の闇のなかでは萎縮したのである。有益な知識の諸対象からとおくはなれ、活動的で力づよい精神をかきたてるような諸動機に接することのない人びとは、わけのわからない専門語のみをうみだし、そしてくだらぬ学問的諸形式を蓄積してゆくことしかできなかったのである<sup>(11)</sup>。」

ケトラーは、こうしたファーガソンの所説のうちに、20世紀の今日にも通じる問題提起があるとして、「ファーガソンの関心は、20世紀の知識人たちによって再三論議されてきた、過度の合理化、非人間化、アトム化、疎外、官僚主義といった問題を、あきらかに予示している<sup>(12)</sup>」という。また、フォーブズもファーガスンは、文明が進んだ段階にとくにおちいりやすいさまざまな危険を問題としているという<sup>(13)</sup>。たしかに、上にみたように、ファーガスンは、文明社会の種々様々な問題をえぐりだす。だが、ファーガソンの文明批判の要点はどこにあるのか。それは単純な利己主義批判ではない。

利己主義は、経済的観点からは、富裕の動因として評価される。「人びとは利益の動機に促されて、働くようになるし、また、営利的仕事を行うようになるのである。職人にかれの労働の成果を保障せよ。また、かれに独立とか自由

の見込みを与えよ。そうすれば、公共は、富の獲得にたずさわる忠実な召使と、かれのえたものをたくわえる忠実な執事を見いだすのである。ここでも政治家は、……わざわざいをもたらさないようにすること以外にはほとんどなにもしえない。かれが、商業の初期に、それに付随しがちな詐欺をいかに抑制するかを知っているならば、十分なのである。商業は、もし継続されるならば、人びとが、自分自身の経験の諸成果にたよっていても、ほとんどあやまることのない部門なのである<sup>(14)</sup>。」したがって、政府は、所有権と自由を保証するだけでよい。「人民の権利と自由を確保するためにつくられた法律は、人口と商業にたいする奨励となるであろう<sup>(15)</sup>。」政府の経済への介入は批判される。「フランスの一般的政策は、穀物輸出はそれが生育する国を枯涸させるにちがいないという想定にたって、最近まで、商業のその部門をきびしく禁止していた。イングランドの地主と農夫は、十分な信用をえて、輸出にたいする奨励金を獲得し、かれらの商品の販売を優遇してもらった。そして、事態の進行は、商業と豊富にとって、国家の諸洗練よりも私的利害関心のほうがはるかによい保護者であることを、示したのである<sup>(16)</sup>。」

こうしたファーガソンの主張は、スミスの利己心と見えない手の立場を想起させる。さらに、両者は、商業があたらしい道徳をうむという点でも類似する。すなわち、ファーガスンもつぎのようにいうのである。「未開時代における商人は、先のことを考えず欺瞞的で且つ欲得づくである。しかし、かれの技術の進歩発達した状態になると、かれの視野は拡大し、かれの原則が確立する。かれは、几帳面、寛大、忠実、且つ、進取な気風を身につけるようになる。そして、全体が墮落したなかで、かれだけは、かれの獲得物を守る力以外の、あらゆる徳性をもつ。かれは、国家から、防衛以外にはどんな援助も必要としないし、また、かれ自身しばしば、国家のもっともそう明で尊敬される成員となるのである<sup>(17)</sup>。」

また、分業による奇型化にしてもそれを相殺するものがある。「あらゆる技術の実施における、また、あらゆる部門の細部における、おおくのところでは、どんな能力も要求せず、そして実際、精神の視野をせばめ制限しがちであ

るとしても、他のところもあって、そこでは、全体的省察と思考の拡大にいたるのである。製造業においてすら、下級職人の天分はそこなわれるとしても、親方の天分は育成されるであろう。政治家は、かれの使用する道具が……無知であるのに、人間生活のはばひろい知識をもつであろう。兵士は手足の少数の動きに限定されているとしても、将軍は、戦争の知識において非常に熟達するであろう。将軍は兵士の失ったものを獲得するのである<sup>(18)</sup>。」さらに、分業は、なによりも、社会に富裕をもたらす。それなしには、生活の諸技術における大きな進歩は考えられない。「技術や職業の分割によって、富の諸源泉がひらかれる。あらゆる種類の材料が非常に完全に仕上げられ、そして、あらゆる商品が、非常に豊富に生産される。…… 国家は、野蛮人がかれの血をもって維持しているあの国民的栄光と力を、その財宝によって、獲得しうるであろう<sup>(19)</sup>。」

では、ファーガスンにとって問題はどこにあるのか。それは、経済的なものではなく、政治的軍事的なものであった<sup>(20)</sup>。すでにみたように、文明社会は商業の時代であり、政治のことはかえりみられなくなる。しかし「政治的諸権利は、かえりみられなくなると、いつも侵害されるのである<sup>(21)</sup>。」また、「われわれが正義にたいする安全保証とするのは、単なる法律ではなく、つぎのような力である。すなわち、その法律を獲得せしめ、そして、そのたえざる支持なしにはその法律も適用されなくなるにちがいない、あの力なのである。さまざまな法令は、人民の諸権利を記録するのに役立ち、そして、法律の言葉が表現していたことを守ろうとする諸党派の意図をかたる。しかし、権利としてみとめられているものを堅持しようとする活力がなければ、単なる記録とかよわい意図では、なんの役にもたない<sup>(22)</sup>。」このようにみたファーガスンは、政治への関心のなくなる文明社会のうちに、政治的隷従という危険のあることをみてとった。それはまた専制政治をうみだすものでもあった<sup>(23)</sup>。すなわち、「専制政治は、墮落のうえに、また、市民的政治的諸徳性の全面的抑圧のうえに、きずかれるのである<sup>(24)</sup>。」

さらに、人びとが墮落すると国家の存立そのものがおびやかされる。正義にとって法よりもそれを支える精神のほうが重要であったように、国家の安全に

とつても、物的資源よりも人間的諸資質のほうが重要なのである。「人口、富、および戦争のための他の諸資源は、非常に重要である。しかし、国民は人間からなりたっている。そこで、墮落し臆病な人びとからなる国民はよわく、力強くて公共的精神をもつ毅然とした人びとからなる国民はつよい。戦争の諸資源は、他の諸利点が等しいところでは、戦闘を決するであろう。しかし、戦争の諸資源も、それらを使用することができない人びとの手にあつては、なんの役にもたたないのである。(25)」だとすれば、文明の諸改善も危険からまぬがれていない。「洗練された時代のほこるべき諸改善も危険からまぬがれていない。それらはおそらく破滅への扉をひらくのであつて、この扉は、それらが閉じた扉のいずれとも同じほど、大きくはいりやすい扉である。それらが、防壁や累壁をきずくとしても、それらは、防壁や累壁を守るためにおかれる人びとの精神の活力をなくする。もしそれらが訓練された軍隊を編成するとしても、国民全体の尚武の精神を衰退せしめるのである……(26)。」

こうして、ファーガスンにとって、文明の危機は、国家の存立そのものの危機として理解されるようになった。しかも、この危機は外部からくるのではなく、内的なもの、すなわち、文明社会に生きる人びとの墮落に起因するものだと思われた。そこでファーガスンは、つぎのようにいう。「小さなはじまりから発達し、支配にいたるような諸技術を所持するところまで到達した諸国民が、かれらの諸利点を、かれらの獲得しうる資格におうじて、獲得するようになったのであれば、かれらが、外的諸災害によって破壊されるまで、中断されることなく幸福な歩みを進みつづけたのであれば、また、かれらが、かれらよりもめぐまれて力強い勢力が台頭してかれらを抑圧するようになるまで、かれらの力を保持したのであれば、思索の問題は、多くの困難をともしなわなかつたし、また、多くの反省を生みだすことはなかつたであろう(27)。」しかし、現実には逆のことを示している。そこで、ファーガスンはとう。「なぜ、諸国民は、名声をたもちえないのか。また、度量、行動、国民的成功の偉大な例として人類の注目を引きつけていた諸社会が、どうして、かれらの榮譽の高みから没落し、そして、ある時代に、かれらが以前にかちとつていた栄光をゆずることに

なるのであろうか<sup>(28)</sup>。」

すでにみたように、スミスは、近代の富裕な文明社会のうちに、文明の永続と拡大の可能性をみていた。それと対照的にファーガスンは、このように、墮落と国家の危機をみるのである。

(1) *EHCS.*, p. 56. 大道安次郎訳『市民社会史』白日書院, 1948年, 上巻, 107 ページ。ファーガスンの近代文明批判は, 古代スパルタ礼賛と表裏の関係にある。この点については, 佐々木武「<スコットランド学派>における<文明社会>論の構成(二)」『国家学会雑誌』第85巻第9・10号をみよ。

(2)(3) *Ibid.*, p. 19. 邦訳, 上巻, 38ページ。

(4) *Ibid.*, p. 12. 邦訳, 上巻, 24ページ。

(5)(6) *Ibid.*, p. 56-7. 邦訳, 上巻, 108-9ページ。

(7)(8) *Ibid.*, pp. 182-3. 邦訳, 下巻, 356-7。

(9) *Ibid.*, p. 218. 邦訳, 下巻, 426ページ。

(10) *Ibid.*, p. 30. 邦訳, 上巻, 57-8ページ。

(11) *Ibid.*, p. 178. 邦訳, 上巻, 348-9ページ。

(12) D, Kettler, *op. cit.*, pp. 8-9.

(13) D. Forbes, Introduction, *EHCS.*, p. xv.

(14) *EHCS.*, p. 143. 邦訳, 上巻, 278ページ。

(15) *Ibid.*, p. 136. 邦訳, 上巻, 264ページ。

(16) *Ibid.*, p. 144. 邦訳, 上巻, 280-1ページ。

(17) *Ibid.*, p. 143. 邦訳, 上巻, 278-9ページ。

(18) *Ibid.*, p. 183. 邦訳, 下巻, 356-7ページ。さきに指摘した学問の職業化にしてもそれなりの効果がある。「創意の諸産物は市場にもたらされる。そして、人びとは、どんなものであれ、知識とか楽しみを与えてくれそうなものにたいしては、よろこんで支払うであろう。こうしたやり方によって、忙しい人と同様に、怠け者も、技術の進歩をすすめるのに貢献するのである……。」(*ibid.*, p. 183. 邦訳, 下巻, 357ページ)。ファーガスンは、知識の商品化の効果を看取していたともいえる。

(19) *Ibid.*, p. 181. 邦訳, 下巻, 353-4ページ。

(20) この立場は、分業にたいするつぎのような見方となってあらわれる。「技術や職業の細分化は、あるばあいには、それらをうまく行えるようにし、そして、それらの目的を促進しがちである。織工や皮なめし工の技術を分割したので、われわれは、靴や毛織物をそれだけ十分に供給されているのである。しかし、市民と政治家を形づくる技術を、政治と戦争の技術を分割することは、人間性を解体し、われわれが向上さそうとしているまさにその技術を破壊するところみである。この分割によって、われわ

れは事実上、自由な人びとから、かれらの安全のために必要なものを取りあげ、そして、外部からの侵略にたいするそなえとして、将来侵略をまねく可能性があり、また、国内に軍政を打立てるおそれのあるものを、おくことになるのである。」(ibid., p. 230. 邦訳、下巻、450—1 ページ)。経済過程における分業ではなく、政治、軍事における分業(官僚制とか常備軍制)を、ファーガソンは問題としているのだ。すでにみたように、かれは、『国富論』出版直後に、その軍隊論を批判していた。

- ㉑) Ibid., p. 213. 邦訳、下巻、417ページ。
- ㉒) Ibid., p. 166. 邦訳、上巻、324—5ページ。
- ㉓) 「墮落と政治的隷従について」が『市民社会史論』終章のテーマである。そのなかで、専制政治の問題も取り扱われる。第6節「専制政治の進展と終末について」をみよ。
- ㉔) Ibid., p. 275. 邦訳、下巻、538ページ。
- ㉕) Ibid., p. 225. 邦訳、下巻、440ページ。
- ㉖) Ibid., p. 231—2. 邦訳、下巻、454ページ。
- ㉗) Ibid., p. 207—8. 邦訳、下巻、405—6ページ。
- ㉘) Ibid., p. 210. 邦訳、下巻、410—411ページ。

#### 4

スミスとファーガソンは、おなじ年に生まれながら、どうしてこのように対照的な文明社会論を展開したのであろうか。その原因のひとつは、かれらの出身のちがいにともめられる。両者はともにスコットランド出身だとはいえ、すずんだロウランドとおくれたハイランドというちがいがあ

周知のごとく、スミスは、カコーディで生まれ、オクスフォード留学、家庭教師としての大陸旅行、『国富論』出版準備のための長期にわたるロンドン滞在をのぞけば、その生涯のほとんどを、カコーディ、グラスゴウ、エディンバラのいずれかでおくったロウランド人であった。スミスの生まれた頃のカコーディは、エディンバラにくらべればはるかに小さいなか町であったが、カコーディとその近くのダイザートでは、製塩、製釘、炭鉱業がさかんで、バルト海貿易の一中心地となっていた。これは、経済学者の幼年時代にとってはめぐまれた環境であった<sup>(1)</sup>。また、学生時代と20代後半から40才にかけての学問体

系形成期を、新興産業都市グラスゴウで送ったことも、スミスの思想形成に大きな影響を与えたであろう。スミスは、スコットランドの急速な発展を眼前にみることができたのである。

他方、ファーガスンが教授として活躍したエディンバラは、スコットランドの政治的文化的中心だとしても、経済的には、この時代に、グラスゴウに先をこされることになる。また、かれの出身地、パースシャーのロジレイトは、ハイランドに属し、フォーズは、この点こそファーガスン理解の鍵になるという。「ファーガスンは、ハイランド人でゲール語を話す人として、エディンバラの文化人たちのなかでユニークであった。したがって『市民社会史論』は、18世紀のスコットランドをふたつにわかつ文明、すなわち、過去に属する氏族社会のゲマインシャフトと、〈進歩的〉商業的ロウランドのゲゼルシャフトとを、内側から熟知した人物（かれのロウランドの友人たちにはもちろん、ただひとつの文明しか存在しない）の作品だったのである。……ファーガスンは、あらゆる点で、まさしくハイランド人であって、『市民社会史論』の背後には、うたがいがなく、これらふたつの社会のあいだの著しいちがいが、つまり、社会の進歩につれて人間になにが生じるかという問題についてのふかい経験がよこたわっている<sup>(2)</sup>。」ファーガスンの文明批判は、おくれた共同体的立場からの批判だったというのである<sup>(3)</sup>。

このような解釈も、ファーガスン自身がつぎのようにのべているのをみれば、それなりの説得力をもつ。「もしぼくがスコットランドのハイランドにいたことがなかったならば、ぼくは、パリとかヴェルサイユの住民を世界で唯一の洗練された人びととする連中とおなじかんがえになったであろう。一度も近隣の山をこえて旅をしたことのない人びとが、男も女も、また、どんな年令のものであれ、自己を完全に制御し、そして、威厳をもって、また、なすにふさわしい事柄を十分に識別して、親切な行為をなしているのは、実におどろきである。これは、われわれの諸都市において、あるいは、われわれの首都において、めったにみられるものではない<sup>(4)</sup>。」

だが、かれらの出身地のちがいが文明社会論の対立の原因であることを否定

しえないとしても、この対立はより内在的に理解されなければならない。ここで両者がいずれもスコットランドを代表する大学の道徳哲学教授であったことが想起される。すなわち、スミスは、1752年から1764までグラスゴウ大学の、他方、ファーガスンは、1764年から1785年までエディンバラ大学の、道徳哲学教授であった。当時の道徳哲学は、あたらしい文明をうみだしつつあった近代市民社会の論理と倫理の解明を意図した総合科学であった。かれらの文明社会論は、かれらの道徳哲学の内容に反映するとともに、かれらの文明社会論のほうも、かれらの道徳哲学の内容に規定されていたのである。スミスの道徳哲学については、これまでも、再三、論及されてきた。そこで、次稿では、ファーガスンの道徳哲学をとりあげ「アダム・ファーガスンにおける人間と社会」を検討する予定である。

- (1) 水田洋『アダム・スミス研究』（前出）、18—20ページ。
- (2) D. Forbes, Introduction, *EHCS.*, pp. xxxviii—xxxix.
- (3) 水田は、ファーガスンの立場を、「スミスやヒュームよりおくれた、ハイランド啓蒙の立場」（水田洋「アダム・スミスとアダム・ファーガスン」、前出、21ページ、高島善哉他、前掲書、106ページ）という。
- (4) J. Small, *op. cit.*, p. 602.

(1982年9月10日脱稿)